アイキャン会報「こどものこえ」2018 年 12 月号

ICAN Children's Voices 69 2018

2018 年 5 月～2018 年 10 月（2018 年度前期）を振り返って

ICAN 事務局長
井川　定一

目まぐるしく変化するこの時代の中で、アイキャンは何をすべきか。それを考える上で、3 つの重要な環境の変化があります。1 つ目は、日本国内の課題の深刻化です。日本は、2030 年代には 3 人に一人が 65 歳以上になると見られており、1%代前半の低い平均出生率と合わせ、超少子高齢化社会に突入します。特に、地方から都市への人口流出は、地域コミュニティの崩壊、更なる「孤立」「孤独」をもたらし、2050 年までに消滅可能性都市は、市区町村の約半数にもなると言われています。2 つ目は、若者の「内向き志向」です。海外勤務や海外留学を希望しない若者が約 8 割となり、「世界のことよりも日本のことを考えるべき」という意見を持つ子どもは、半数を超えました。Google の検索機能で 1994 年 1 月に「国際協力」と検索した人を 100 とすると、現時点で 12 にまで落ち込んでいます。日本において、グローバルな課題への関心が急激に失われ、その結果、多くの日本の NGO は、活動の継続が困難になっています。3 つ目として、世界では、多発する紛争や自然災害等により、「第二次世界対戦以降最大の人道危機」(国連) が起こっています。また一見成長著しいフィリピンのような新興国でも、インフレで格差が拡大し、路上の子どもたちを含め、低所得層の生活は著しく厳しいものとなっています。世界は危機に瀕しているのです。

このような背景を経て、アイキャンは、新たな 3 つの活動方針を打ち出そうとしています。1 つ目は、「『課題先進国』である日本の課題を抜本的に解決する」ことです。特に本部事務所がある中部地域は、急激な過疎化に苦しむとともに、多くの外国にルーツを持つ人々がいます。これからは、海外事業と同じくらいの力を国内課題の解決にも注いでいきます。2 つ目は、「世界で最も危機的状況にある地域の課題を抜本的に解決する」ことです。これは、イエメンやソマリア、ジブチ等の「アフリカの角」周辺地域とフィリピンの中でも、路上の子ども、ミンダナオ、自然災害の課題を解決するというこの数年の活動方針を強化するものです。国内の課題と海外の課題を繋げることで、社会課題の解決能力を更に高めていきます。そして最後は、「日本の NGO の活動環境を抜本的に改善する」ことです。政策提言を通じて日本政府と日本の NGO の関係性を変えることで、日本の NGO の活動基盤を強化するとともに、各地域において多くの若者が国内外の課題を課題できる環境を整備していきます。全てに「抜本的に解決・改善」とある通り、アイキャンは、それぞれの柱で、きちんと成果を出し、大きく社会を変えて行きます。

さて、今期、マニラにある児童養護施設「路上の子どもの家」の 2 階の増築準備が始まりました。2 階部分が出来上がると、30 名～50 名の身寄りのない路上の子どもたちが継続的に生活できることになります。裏ページに寄付募集について記載をさせていただいておりますので、ぜひご協力をお願いします。私たちを信じて預けて下さったご寄付は、必ず困難な立場に置かれている人々の生活を向上させ、社会を変えます。いつもアイキャンの活動を応援していただき、心より感謝申し上げます。

特集１：ジブチ全土で「子どもの保護」を推進するジブチ事務所川口

2018 年 5 月からアイキャンが活動を行っているアフリカジブチ南部の難民キャンプについて、アイキャンで約 15 年ボランティアを続ける秋穂玲奈さんが、ジブチ事務所所長の川口彩子にインタビューをしました。

アイキャン
ジブチ事務所所長
川口 彩子

秋穂さん：フィリピンで活動していたアイキャンが、アフリカや中東で活動を開始した時は驚きました。

川口：2017 年、世界では、6,850 万人が紛争や自然災害で住処を追われました。これは統計開始以来、過去最高の数字です。残念ながら日本ではほとんど知られていませんが、国連は「第二次世界大戦後最大の人道危機」と警鐘を鳴らしています。世界の注目がシリアに集まる一方、イエメンやソマリアは、あまりに過酷な環境のために活動する人道団体は限られてきました。アイキャンが、この地域で活動を開始したことは、世界全体を俯瞰すれば、必然とも言えます。

秋穂さん：そんなに過酷なのですか？

川口：紛争が続き破綻国家となったイエメンとソマリア、世界で最も報道の自由度がない独裁国家エリトリア、政情が不安定なエチオピア東部、この 4 つの国に囲まれて位置する世界で最も熱く、夏には 50 度にも達する国ジブチ。この地域ほど過酷で、人道ニーズの高い地域は世界にはないかと思います。

秋穂さん：大変な地域ですね。川口さんがいるジブチの治安は大丈夫ですか？

川口：はい、ジブチの治安は良く、夜一人でも歩けるほどです。治安が安定しているために、四国の 1.3 倍ほどの面積、人口約 95 万人の小国に近隣諸国から 3 万人弱もの難民が避難しているのです。

秋穂さん：アイキャンは、ジブチでは、難民キャンプで活動しているのですね。

川口：はい。アイキャンはジブチの 3 つ全てのキャンプにおいて、国連 UNHCR と契約がある唯一の公式な「子どもの保護」の代表団体として活動しています。2016 年に活動を開始したイエメン難民が 100%を占める北部のキャンプでは、約 2,200 人が生活し、2018 年から開始した南部のアリアデ難民キャンプでは、人口約 15,200 人の内、約 32%がエチオピア、約 65%がソマリアから、そして隣接するホルホル難民キャンプでは、人口約 5,600 人のうち約 61%がエチオピア、約 36%がソマリアから来ています。キャンプは町から離れており、時折四駆のランドクルーザーでも立ち往生する、月面のような道なき道を毎日通っています。

秋穂さん：具体的には、どのような活動をしているのでしょうか？

川口：紛争から逃れてきた子どもたちが少しずつ心の傷を癒せるようスポーツ等の活動を行いつつ、カウンセリングや虐待等のケースへの対応を行っています。また、難民の青少年や保護者に対する、子どもの権利や心理に関する研修も実施しています。多くの活動は、難民の若者のボランティアが中心になって進められていて、アイキャンの強みである「人々とともに」活動することが、ジブチでも活かされています。

秋穂さん：それにしても全土で活動するのはすごいですね。

川口：難民の人々、現地政府、国連機関、ジブチの人々と一から人間関係を築いていくのは本当に大変でした。活動には、最低、日本語、英語、アラビア語、フランス語、ソマリア語、アファル語が必要です。アイキャンのスタッフも、日本、ジブチ、フィリピン、ケニア、イエメン、ソマリア、エチオピアと多国籍で構成され、これに加えて、各国から来る国連職員との調整があります。今でも、活動が予定通りに進まず、問題が生じることは日常茶飯事です。

秋穂さん： 毎日とても忙しいと思いますが、どのようにモチベーションを保っていますか？

川口：一番は、子どもたちの笑顔ですね。以前は難民キャンプを訪れても遠くで見ているだけだった子どもたちが、アイキャンスタッフを見ると笑顔で挨拶をしてくれるようになりました。また、スタッフやボランティアが子どもを取り巻く環境を積極的に改善しようとしているのを見て、私ももう少し頑張ろう、と後押しされています。

秋穂さん：大人の変化はいかがですか？

川口：保護者からは、「アイキャンが来てから、子どもに関する悩みを気軽に相談できるようになった」との声を頂いています。大人だけでなく、自分自身が難民でボランティアをしている青年は、「子どもの保護ができるだけでなく、自分の知識や経験に繋がっており嬉しい」と話してくれました。

秋穂さん：ありがとうございます。普段接することがない難民についてよりイメージが湧きました。最後に、今後への意気込みを聞かせていただけますか？

川口：難民とはいっても、子どもはどこに生まれても子どもですし、安心して食事や睡眠を取れる場所を持てるべきだと思います。大人もこれまで家族や仕事を持っていた人が突然「難民」となり、ただ食糧や住居の提供を待つだけの存在となってしまいます。全ての問題を解決することはできませんが、子どもの保護を通じて全ての人が尊厳と自信を持って生活できるよう、今後も活動を続けていきます。

ボランティア
秋穂 玲奈さん

特集２：政策提言を通じて、NGO 全体の強化を目指す事務局長井川

2017 年 10 月からアイキャンが行っている NGO と日本政府の連携促進に関する政策提言事業について、新しくマンスリーパートナーになっていただいた三矢淳子さんが、事務局長の井川定一にインタビューをしました。

アイキャン
事務局長
井川 定一

三矢さん：こんにちは。早速ですが、まず、政策提言という聞き慣れない言葉について教えてください。

井川：本当に聞き慣れない言葉ですよね（笑）一言で言うと、「日本の NGO と日本政府の連携を促進し、日本の NGO 全体を強化すること」でしょうか。

三矢さん：なるほど。なぜアイキャンだけではなく、日本の NGO 全体を強化する必要があるのでしょうか？

井川：良い質問ですね。それは、心の底から貧困や紛争で苦しむ人々がいない社会を見たいからです。アイキャンは、他の NGO が活動することが困難な過酷な場所で活動しており、大きく平和な社会に貢献していると自信を持って言えます。同時に、アイキャンだけでは、絶対に、平和な社会を作ることができません。絶対にです。それであれば、アイキャンは、自団体のことだけを考えるのではなく、NGO 全体がより活動規模を拡大し、効果的に世界の課題を解決できる環境を作るべきだと、考えました。

三矢さん：この事業をアイキャンとしては、2017 年から開始されたということですが、きっかけはあったのでしょうか？

井川：このように言うと引かれるのですが、私は、事務局長になった 10 年以上前から毎年全国の NGO の財務諸表に目を通してきました。

三矢さん：それは引きますね（笑）

井川：ですよね（笑）一部を除く全国の NGO の財務状況が、この数年一気に悪くなっていて、大きな危機感を覚えたのがきっかけです。日本社会が内向きになり、多くの団体では寄付収入が伸び悩んでいます。一方、世界の紛争や自然災害の被害は年々大きくなっていく。NGO は本来持つ能力を最大限引き出し、一人でも多くの命を救う必要があると思います。

三矢さん：なるほど。確かに、みんなで力を合わせるほうが影響は大きいですね。具体的には何を行ったのですか？

井川：まず、私自身は、日本の NGO と外務省の正式な連携協議の委員会で NGO 側の副代表になりました。それまで NGO 側の委員は東京中心の 4 名のみで構成されていたので、全国各地の NGO に声をかけ、10 名に拡充を行いました。そして他の委員とともに、毎年アンケートで全国の NGO の意見を集約し、重要な事項については、日本の NGO が 1 つになって、外務省との連携や制度改定の提案を行えるようにしました。結果、この 2 年で、日本の NGO と外務省の関係は大きく改善し、外務省資金制度も NGO にとって使いやすいものに変わってきました。全国の NGO の委員や外務省の方々の努力の賜物だと思います。感謝しています。最近は、日本の NGO が政府 ODA 事業を実施する際に、すべての費用が提供されることを目指して、多くの時間をその資料作成や交渉等に費やしています。これが実現すると、日本の NGO は、年間数百万円から数千万円の自団体の資金を、より必要な活動に使用したり、寄付を増やすための広報に活用したり、できるようになります。

三矢さん：それはすごいですね。NGO の中での変化はあったのでしょうか？

井川：これまでの NGO の政策提言は、東京の財務的余裕がある団体が中心となって行われてきましたが、この 2 年間でより民主的に地方の団体、小規模の団体の声が政策に反映されるようになった意義は、とても大きいと思います。また、政策提言の重要性が認識され、現在は、全国の NGO が年会費を払い、委員の交通費等を捻出する持続的な体制に変えることができました。

三矢さん：NGO 内部の変化も大きかったのですね。外務省以外との連携も促進しているのでしょうか？

井川：外務省以外では、NGO と JICA の連携を促進する委員会で、私は NGO 側のメインフォーカル（取りまとめ役）を努め、これとは別に NGO と国連の連携の促進にも力を入れています。アイキャンは国連との連携事業が既に出来ていますが、他の団体もできるようになると、世界のより多くの課題が解決されます。

三矢さん：お話を伺うまで、政府と NGO って全く逆の存在だと思っていました。

マンスリー
パートナー
三矢 淳子さん

井川：このグローバル化した時代において、日本に住む人だけが、平和な生活を送ることは不可能です。外務省は、国益を生み出すための組織ですが、世界の貧困や紛争が解決されることは、日本の生活の安定、国益に繋がります。私たち NGO は、国益に基づく組織ではありませんが、世界の貧困や紛争を解決したいという点では、一致しています。それであれば、両者は力を合わせられる点では、力を合わせ、世界の課題を解決するべきだと思います。もちろん NGO は多くの市民に支えられ、独立した運営をした上で、です。

三矢さん：最後に。かなりの業務量だと思いますが、これまでの事務局長としての仕事との両立はできていますか？

井川：するどい質問ですね（笑）この政策提言関連で、小さいものを入れると月に 10 ほどの会議があり、それ以外に NGO 間での意見調整や資料作り等もあるので、確かに大変です。毎日遅くまで働き、これまでのアイキャンの仕事と両立しようとしています。志を共有し、ともに活動を進めてくれるアイキャンの仲間や全国の NGO の仲間、外務省の方々に感謝しています。抜本的に日本の NGO を強化することで、きちんと世界を良い方向に変えていくつもりです。

2018年5月～2018年10月のアイキャンの活動

Ⅰ　危機的状況にある子どもたちとともに行うプログラム

※アイキャンの事業年度は毎年5月1日に始まります。

1．フィリピン（アジア）

＜首都マニラ近郊＞

路上の子どもたちが生活する地域で、勉強を教え、食糧やお昼寝の場所を提供するドロップインセンターを週4回（1回約15名）開所し、地域行政と協力して夜中の見守り活動を行いました。元路上の子どもたちによって運営されるカリエカフェでは、財務管理方法などを学ぶ技術訓練研修を計6回（延べ28名）実施し、児童養護施設「子どもの家」では9月、入所中の子どもとボランティア25名が菜園を作り、10月末に収穫しました。

ごみ処分場周辺地域では、協同組合PICOの診療活動再開とフェアトレード商品生産団体SPNPのバザー出店を補助するとともに、経営方針や商品開発の会議を10回実施（54名参加）しました。

＜ミンダナオ島＞

ミンダナオ島**南部ジェネラルサントス**では、1994年から実施してきた奨学金提供事業において、最後の奨学生4名が大学を卒業しました。卒業式後に、奨学生たちはこれまでの学生生活を振り返り、将来の夢について語り合う時間を設けました。

中西部の治安が不安定なコタバト市において、若者への平和教育についてユニセフと連携の協議を行いました。

中東部の先住民の子どもたちが多く住むブキドノン州では、6つの無電地域において、過去に提供したソーラーランタンのモニタリングを行いました。ランタンによって日が沈んだ後も学校の授業が実施できるようになり、成績が上昇していることが確認されました。

2．ジブチ（アフリカ）

ジブチ全土の難民の「子どもの保護」分野で、国連（UNHCR）指定の代表団体となりました。

イエメン難民のキャンプでは、青少年難民ボランティアと保護者に対して子どもの権利・保護に関する研修を計4回（計80名）、子どもへの課外研修を1回（計12名）、「子どもの広場」のスポーツ等の活動を週5回（1回平均40名）行いました。

ソマリアやエチオピア難民のキャンプでは、青少年難民ボランティアや他NGO職員に対して子どもの権利・保護に関する研修を4回（計111名）、「子どもの広場」のスポーツ等の活動を週5回（1回平均35名）、障がいを持つ子どもや虐待を受けている子どもへの家庭訪問を週1回（1回平均5件）実施しました。

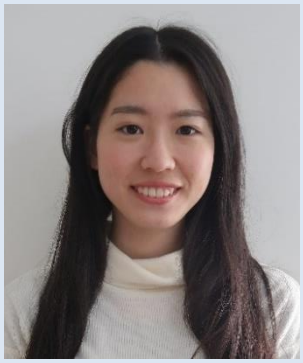
3．イエメン（中東）

港湾都市であるホデイダ州では戦闘が激化し、周辺のハッジャ州等を含め、多くの避難民が出ています。今期**ハッジャ州**で2,784世帯、**ホデイダ州**で600世帯へ食糧提供を行いました。提供世帯は、2015年から延べ約30,500世帯（約213,500人）となりました。

メディア掲載（8件）

AFP（記事）イエメン1件
Alsahat channel（テレビ）イエメン4件
Rai Al Yemen（記事）イエメン1件
UNHCR（記事）ジブチ2件

～アイキャンに入ってみて～　ICAN日本事務局　三矢　愛紗



～プロフィール～
大学卒業後、銀行勤務を経て、英国大学院修了、2018年10月入職

初めまして。10月に入職し、現在はイエメン・ジブチの事業管理や助成金申請業務、Facebookを通じた活動発信等を行っています。アイキャンに入る前、まだ銀行で働いていた頃は、海外での紛争について報道があっても実際自分に何ができるかわからず、日々もやもやしていた記憶があります。今ではみんなが生きやすい社会を作るために、海外での活動を日々進めるとともに、日本国内で関心のある人を増やすことを、少しずつ実践しています。「貧困」や「紛争」について来訪者に考えてもらうきっかけとして、先日、右のカードをさり気なく事務所のあちこちに置いてみました。日々ニュースで耳にするような国内外の社会問題について、より敏感になって貰えれば、嬉しいです。

Ⅱ　「できること（ICAN）」を増やすプログラム

1．能力強化事業

愛知県、岐阜県にある教育機関及び企業等にて、計 8 回（463 名）イエメンやフィリピンに関する**講演**を行うとともに、フィリピンとジブチの海外駐在員による帰国報告会を 2 回行い、計 18 名が参加しました。

フィリピンでは、事業地を訪問する**スタディツアー・国際理解海外研修**を計 4 回実施し、計 47 名が参加しました。

フィリピンで 3 名、日本事務局で 1 名の**インターン**を受け入れ、フィリピンではフェアトレード及び路上の子ども事業の補佐を、日本では街頭募金やフェアトレードの出店に携わっています。

2015 年国連サミットで採択された SDGs（持続可能な開発目標）をテーマに自分のアクションに関する絵を描くアイキャンイベント「**SDGs Youth Action Plan 2018**」を実施し、愛知県内小中高生、フィリピン・ジブチ・イエメンの子どもたち約 4,500 人が参加しました。

NGO 相談員業務として、NGO やボランティア等に関する相談を 534 件受け付け、愛知、東京、長野の教育機関での講演やイベント出張を計 4 回実施しました。

チャリティ語学教室では、英語（週 6 回）とタガログ語（週 3 回）の授業と英会話イベントを 1 回実施しました。

2．ボランティア・寄付活動推進事業

フィリピンとイエメンのための**街頭募金活動**を計 5 回実施し、インターン 1 名とボランティア延べ 66 名が参加しました。

ハガキ計 22,092 枚に加え、**古本、切手、テレフォンカード、商品券**のご寄付をお預かりしました。また、**事務局ボランティア**延べ 158 名が切手・ハガキ等の物品カウント作業や会報の発送作業を手伝ってくださいました。

今期、ホームページ等から**マンスリーパートナー**が 24 名増え、より安定した活動ができるようになりました。

「フェアトレード・デー・なごや 2018」や「環境デーなごや」等計 6 つのイベントに出店し、インターンとボランティア計 89 名が**フェアトレード商品の販売**を行いました。

3．政策提言事業　　※NGO・外務省連携推進委員、NGO-JICA コーディネーターとしての活動

今期、全国の NGO アンケートに基づき、86 団体の意見集約を行いました。これを踏まえ、事務局長井川が、連携推進委員副代表として、外務省の資金制度の改善や連携について、**外務省との協議**を 8 回行いました。一方、JICA ボランティアと日本の NGO の連携や JICA の資金提供制度について、NGO 側のメインフォーカル（取り纏め担当）として、**JICA との協議**を 7 回行いました。また、より多くの日本の NGO が国際機関と連携ができるように**国際機関との協議**を行いました。

私がアイキャンに入って、感じたことは 3 つあります。1 つ目は、新しく職員になった私にも、重要な仕事を担わせてくれることです。2 つ目は、先輩・後輩職員の間で、常に現状を変えていくための意見を提案し合い、正直に意見を述べ合える環境があることです。3 つ目は、社会を良くしていくという目標のために頑張る職員全員を尊敬できることです。目的意識を持たず入職した職員は一人もおらず、皆前職を経て、それぞれが社会を良くしたいという強い「想い」を持って集まっています。完全な分業ではないため一人ひとりが多岐に渡る業務を抱えていることや、企業が一切進出しないような過酷な場所で活動をしていることにより、毎日のように次から次へと課題が発生し、業務がスケジュール通りに進まないこともよくありますが、とても働きやすい職場だと感じています。皆が皆、私のように NGO に入る必要はありませんが、一個人という小さい存在であっても、社会を変えていく力は誰もが備えていると思います。私自身、アイキャンに入ってまだ 2 か月しか経っていませんが、ボランティアの方々・同僚との会話を通して、私にも「今できること」、「今後できるかもしれないこと」が数多くあることに気づきました。

2018年5月「フェアトレードへの想い」

<フェアトレード事業>

ICAN日本事務局
宮澤　卓海
～プロフィール～
大学卒業後、2018年
3月よりインターン

私は、インターンとしてアイキャンに携わり、実際にアイキャンのフェアトレードの事業地であるフィリピンのパヤタスゴミ処理場を訪れるまで、「フェアトレード」に関して専門的な知識はほとんどなく、「ただ何となく知っている。」という程度のものでした。私が初めてパヤタスを訪れるきっかけになったスタディーツアーでも、参加した一番の目的はアイキャンが保護活動を行っている路上の子どもたちとの交流であり、フェアトレードに対して特別強い関心があったわけではありませんでした。

ツアーの中で、パヤタス・フェアトレード商品生産者のお母さんたちのお話を聞く機会がありました。「昔は、毎日大量のゴミが集まるゴミ山へ登り、お金に換えることができそうな物を集めては売って、毎日危険な生活を送っていました。それから、より安全な方法で収入を得るためにアイキャンの職業訓練を経て、今では自分たちの作った商品の売り上げだけで生活ができるようになりました」と誇らしげに彼女たちは、語っていました。自分が作った商品が売れたときに飛び切りの笑顔で喜び、飛び跳ねる生産者の光景を目の当たりにしたことで、フェアトレードに対する気持ちや想いが変わり、多くの人にフェアトレードを伝えたいと思うようになりました。

5月12日に名古屋市で行われた「フェアトレード・デーなごや2018」にアイキャンは出店し、パヤタスのお母さんたちが作ったフェアトレード商品の販売を行いました。私はこのイベントは、生産者の方々の想いや、この商品たちができるまでのストーリーを伝える絶好の機会だと思いました。そして、ただ商品を販売するだけではなく、自ら来場者の方に積極的に声をかけることを心掛けました。もちろんそんな自分の声をすべての人の耳や心に届けるというのはとても難しいことだと思います。ですがその中でも、この商品がどのように作られたのかを伝える私の話に真剣に耳を傾けて下さる方々や、「商品づくりの技術や知識が無かった方々が、今ではこんなにかわいくてしっかりとした商品を作れているのは凄い！」と驚かれている来場者の方もいらっしゃいました。

私はフィリピンで生産者の方々と活動をしているわけではないため、彼女たちのそばで何かをすることはできません。ですが、生産者のお母さんたちが作ったフェアトレード商品が少しでも多くの人の手に渡り、現地の状況をより多くの方に知ってもらうことで、彼女たちが見せてくれた飛び切りの笑顔と笑い声がもっともっと広がるように活動をしていきます。

ある日のスケジュール

12:00 メールチェック
12:30 街頭募金準備
13:00 ボランティアへの事業説明
14:00 栄で募金活動
17:00 片付け・振返り
18:30 チャリティ語学教室に参加
20:00 募金活動報告書作成
21:00 帰宅

フィリピン事業（マニラ・路上）　5月11日／ケソン（フィリピン）

元路上の若者の接客・商品開発能力の向上

カリエカフェのメンバーが、新商品開発や接客スキル向上を目的に、スターバックスコーヒーを訪問しました。接客や商品内容、陳列方法等を観察し、その学びを基に、カリカカフェに戻り、ドリンクやドーナツの試作品を作りました。メンバーは「店員はとてもプロフェッショナルで、私たちの目を見て笑顔で対応をしてくれました。」と語り、この経験をカリエカフェに反映させようとしています。

ジブチ事業　5月2日／ジブチ市（ジブチ）

子どもの保護事業に関するパートナーシップ契約を締結

アイキャンはUNHCRと、ソマリアやエチオピア難民の子どもの保護事業に関するパートナーシップ契約を締結しました。UNHCRジブチ代表から、「アイキャンとパートナー契約が結べたことを嬉しく思う。プロジェクトを通して、子どもの保護活動が推進され、彼らをとりまく環境が改善されることに期待している。」とのコメントをいただきました。今後、ジブチにおけるアイキャンの活動を一層強化していきます。

街頭募金　5月26日／愛知

紛争地イエメンの子どもたちを応援する街頭募金

紛争地イエメンの子どもたちの為の街頭募金活動に、18名のボランティアの方々が参加し、79名の方々から募金を頂きました。参加者からは、「今後ますます暑くなっていく中で、どういった点を心がけていく必要があるか」、「通行人の方が目の前を通る短時間の間に、どれだけ強い、心に響く、心に残る言葉を訴えかけることができるかが重要なのではないか。」といった感想がありました。

講演・イベント・訪問受入れ　5月20日／岐阜

ガールスカウト岐阜県連盟総会での講演

「ガールスカウト岐阜県連盟総会」において約50名を対象に、フィリピンの路上や紛争地で暮らす子どもたちの現状とアイキャンの活動について講演を行いました。参加者からは、「フィリピンの路上の子どもたちが助け合いながら学んでいく姿に感動しました。」「私たちも人に役立つ少女・女性になれるよう、できる所から活動していきたいと思っています。」などの感想がありました。

2018年6月「世界はみんなの力でできている」

＜NGO相談員事業＞

ICAN日本事務局
吉田　文
～プロフィール～
中京大学を卒業後、ベンチャー企業営業職を経て、2009年7月より現職

ある日のスケジュール
11:00 メールチェック
12:00 日本事務局会議
14:00 事業別会議
15:00 プレゼン資料作成
16:30 教育関係者と研修打ち合わせ
17:30 フィリピンからの支出申請処理
18:30 チャリティ語学教室対応
20:00 帰宅

アイキャンには、毎月、学校や企業、各種イベント等、様々な出張授業・講演等のご相談が入りますが、このようなご相談は年々増加しており、喜びを感じています。しかし、講演を通して「世界の現状を知った」「NGOの活動の大切さを知った」とおっしゃっていただけるのは嬉しいのですが、残念ながら、単に「知る」だけでは、この世界は変わらないのです。

私は、どのご依頼に対しても、単に世界の現状やNGOの活動を知ってもらうことだけを目的にお話をしたことはありません。いかに「世界はみんなの力でできている」ということに気付いてもらえるのか、世界規模の課題を自分と結びつきのある「自分事」として捉えて「行動」に移してもらえるのか、を考えています。そのために、対象に合わせた分かりやすい事例や、関心を示しそうな身近な話題を盛り込んで準備をしています。特に小・中学生が対象の場合には、教員の知人や友人に、言い回しや言葉選び、事例が適切であるか、誤解を生むことにならないか、等の相談をすることも少なくありません。資料を何度作っても伝えたいことが納得いくようにまとまらず、当日の講演開始ぎりぎりまで準備をしていることも多々あります。

6月8日に、国士舘大学の学生約170名を対象に、出張講義を行いました。お話をさせていただいた内容は、大きく「世界の課題と私たちとの結びつき」「世界の現状と具体的なNGOの活動や存在意義」「私たちにできること」の3つです。講義後は、「世界の問題は自分自身の問題でもあると気が付いた」「安定を求めるのではなく、社会課題の解決を目指した就職活動がしたい」「心のどこかでは他人事だった。私にできることを見つけ動かなければ」「小さな積み重ねが大きな力になると知った。私にできることを1つ1つ大切にしたい。」という声を学生からいただきました。また、大変嬉しいことに、聴講生の中の数名が、ボランティア希望のご意向をくださったり、学校で取り組める貢献活動についてのご相談をくださったりしました。講演の効果を計るのは難しく、未だに反省することは多々ありますが、聞いてくださる方の心を動かし、行動に移すきっかけを作ることができればと思っています。

世界はみんなの力でできています。だからこそ1人1人の力で変えることができるのです。信じ続けているこの想いを大切にしながら、今後も経験を積み、私自身が、皆さんの行動の「きっかけ」になれるよう、これからも努めて参ります。

フィリピン事業（マニラ・路上）　6月4日／マニラ(フィリピン)

路上の子どもたち14名が復学しました

ドロップインセンターの子どもたち14名が、復学しました。ソーシャルワーカーによる日々の基礎教育活動やカウンセリング活動に力を入れたことにより、今年は、昨年（9名）以上の子ども達が復学することができました。復学したアンソニー君（10歳）は、「学校へ戻ることは出来たが、通い続けられるように、しっかりと勉強についていき頑張っていきたい。」と話しました。

フィリピン事業（マニラ・ごみ処分場）6月14日／パヤタス(フィリピン)

新しい販売場所開拓のためのミーティング

この日、フェアトレード生産者団体（SPNP）のお母さんたちとミーティングを行い、収入を安定化させるために、新しい販売場所の確保等について話し合いました。ミーティングでは3カ所の候補に対してアプローチしていくことを確認しました。新しい販売場所候補に適した商品の開発も進めていく予定となっており、メンバーの一人は「もし新しい販売場所でうまくいけば、さらに他の店にも広げていける。」と、意気込みを語りました。

NGO相談員　6月23日／愛知

「ぼらマッチ！なごや」に出展しました

愛知学院大学を会場に行われた、「ぼらマッチ！なごや」に「ＮＧＯ相談員」として参加をしました。組織運営・基盤強化に関する相談や、ボランティア・インターンについて、多くの質問を頂きました。ご質問いただいた方からは、「ＮＧＯ相談員という気軽に活用できる相談窓口があることを知ることができてよかった。」とのコメントを頂きました。

講演・イベント・訪問受入れ　6月30日／愛知

「アジアン・カフェ」で事業説明を行いました

コープあいち主催の「アジアン・カフェ」というアジアの七夕をモチーフとしたイベントにご招待いただき、フェアトレード商品の販売や、クイズなどを交えながら、アイキャンの事業説明を行いました。フィリピンから来日した方の生活改善に関わっていらっしゃる参加者の方からは、「アイキャンの事業や活動を知って刺激になった。自分ももっと頑張りたい。」との感想を頂きました。

2018年7月「理想の地域をともに考え、実現していく」

<スタディツアー・国際理解海外研修事業>

ICAN マニラ事務所
May Ann Prudencio

～プロフィール～
大学卒業後、NGO や社会福祉開発庁での勤務を経て、2016 年 5 月より現職

ある日のスケジュール
8:00　買い出し
9:00　料理補佐
10:00 子どもの学習サポート
11:00 会計事務作業
13:00 カウンセリング
14:00 家庭訪問
15:00 子どもとの交流後、報告書作成
17:300 帰宅

2011 年からフィリピンで実施している名古屋国際高等学校海外研修は、この 2018 年 7 月で 8 回目を迎えました。今年の参加者 12 名は、15 日間の滞在で、フィリピンの私立、公立高校への授業参加、パヤタスのごみ処分場への訪問、路上の子どもたちとの交流、田舎でのホームステイや、在マニラの日系企業・社会起業家への訪問など、多くのプログラムに参加しました。

この研修のメインイベントは、マニラから南へ 3 時間ほどに位置するカビテ州で、2 泊 3 日、アイキャンの事業地であるパヤタスゴミ処分場や路上の子どもたちとともに行う合宿、“Youth Congress”です。初めて参加者同士が研修会場で会ったときは、お互いが言葉の壁を乗り越えて仲良くなれるか、人前でしっかりと発表することができるか等の不安を抱いていました。しかし、自分と家族のことをグループで発表するワークショップを通して、参加者同士の距離はまたたく間に縮まりました。フィリピンの子どもたちは、「私の父は刑務所にいる。」「一番下の妹は病気で亡くなってしまった。」など、それぞれの事情を打ち明けてくれました。それに対し日本からの参加者が彼らを抱きしめ、肩をさするなど、励ます様子が見られました。

合宿内最後のワークショップは、グループごとに理想の地域とは何かを話しあい、それを絵で表すというものでした。参加者は、自分たちが住んでいるフィリピンと日本の地域の良い所、悪い所、どうすればより良い地域になるか、などを話し合いました。完成した理想の地域には、「みんなが愛情を持っていて、平和な地域」、「学校、病院、市場があり、様々な宗教が共存している地域」、「夜は街頭に明かりがあり、道が綺麗で安全な街」などが出てきました。また、理想の地域を実現するために、「自分の身近な人へ感謝を伝えるようにする。」「相手との違いを受け入れ、差別をしないようにする」、「フィリピンの子どもたちが学校や病院に通えるように建築士になる」等、それぞれが決意を表明しました。

Youth Congress は、異なる背景の若者・子どもが共通のビジョンである理想の地域を描き、それを実現するための行動を促すことを目的とした研修です。私は、子どもたちが子どもらしく生活できる社会を、大学生のころから目指し、ソーシャルワーカーになりました。今回研修に参加した子どもたちも、理想の地域を実現するために、今回の決意を忘れずに、実行していってくれることを願っています。

ジブチ事業　7 月 24･30 日／ホルホル(ジブチ)

新たな難民キャンプで「子どもの広場」の活動を開始

ソマリアやエチオピア難民が暮らすホルホル難民キャンプでの活動を開始しました。2 回の活動では、サッカーや塗り絵を行い、延べ 74 人が参加しました。最初は緊張していた子どもたちも、2 回目の活動の際は、1 回目の活動で制作した作品を大事そうに持ってスタッフへ近づく場面もありました。子どもたちからは「次はいつ？」と、早くも次の活動を楽しみにする声があがりました。

イエメン事業　7 月 15 日-17 日／ハッジャ(イエメン)

696 世帯への食糧提供を実施

イエメンの中でも深刻な食糧不足に陥っている地域の一つである西海岸のハッジャ州において、696 世帯への食糧提供を実施しました。お年寄りや女性、障がい者等の、自力で提供場所まで来られない人々には、シェルターまで届け、最も弱い立場の人へも提供しています。10 人家族を持つハディージャさんは「食糧提供のおかげで、日々の食糧を確保することができた。」と話しました。

チャリティ語学教室　7 月 5 日／愛知

語学とともに、社会課題を学ぶ

英語やタガログ語を学びつつ、その授業料がフィリピンやイエメン・ジブチの子どもたちを笑顔にする活動に使われる、語学教室「スマイル・チケット」で、この日も、フィリピンの状況を紹介しながら授業が行われました。参加者の女性は、「自分たちが英語を学ぶことが、路上や紛争地の子どもたちの生活向上につながると思うと嬉しい」と話しました。

講演・イベント・訪問受入れ　7 月 14 日／愛知

Aichi SDGs Youth Action Plan がスタート

愛知県立千種高等学校の 2 名の学生が、日本事務局にて職場体験実習を行いました。アイキャンの活動について説明後、交流事業で使用する絵手紙を作成しました。17 つの SDGs（持続可能な開発目標）から、関心のある目標を選び、想いや考えを描いてもらいました。「物を簡単に捨てず、物を使うことに責任をしっかりと感じる。」「男女が平等に学べ、女性がもっと社会に出られるように。」と想いを込めました。

2018年8月「イエメンの人々の声を届け続けます」

<イエメン事業>

ICAN東京事務所
北島　美聡
～プロフィール～
大学卒業後、小学校教員、青年海外協力隊及び公益社団法人での勤務を経て、2018年5月より現職

ある日のスケジュール

9:00　イエメン情勢の確認
10:00 食糧提供進捗確認
12:00 写真・報告確認
13:00 JPF月報作成
14:00 職員との連絡
15:00 事業別会議
16:30 イエメン給与の支払準備
18:00 帰宅

イエメンの紛争が本格化した2015年3月から、約3年半が経ちますが、紛争の終わりは見えるどころか、悪化の一途をたどっています。6月から激化した西海岸アル・ホデイダ州での戦闘を皮切りに、各地で戦闘が激しさを増し、8月には大規模な空爆が2か所でありました。アル・ホデイダ州では20人以上の子どもが、北部サアダ州においては子どもたちが乗ったバスへの空爆で55人が犠牲となりました。こうした治安悪化や情勢不安は、物価高騰やイエメン通貨の暴落に拍車をかけ、人口の3分の2にあたる1,780万人が食糧不足に陥り、「世界最悪の人道危機」と呼ばれています。そのような中、アイキャンは、2015年12月からイエメン国内において食糧提供を開始し、これまでに延べ20万人以上に食糧を提供してきました。最も困難な人々に希望を届けたいという想いから、戦闘が最も激しく、外部機関も入りづらい西海岸を中心に、食糧を届け続けています。

しかし、こうした紛争地での活動には、大きな困難がつきまといます。例えば、現在、イエメン全土での食糧不足や物価の高騰により、食糧を提供地近郊ではなく、首都サナアで購入し運搬を行うケースが増えていますが、運搬距離が長いほど、強奪・脅迫・トラック車列の空爆等のリスクは拡大します。そのため、常に運搬ルートを吟味する必要があり、共に移動する担当者はもとより、首都サナアや日本の事務所でも緊張が漂います。さらに、提供の場所やタイミングに関しても、慎重にならざるを得ません。多くの人が集まるということは、空爆のリスクのみならず、集まる人の間での争いのリスクも高めることになります。そのため、事前の行政や治安担当部局との調整や公平な提供基準の遵守・公表が必須となります。人々は空爆に敏感になっているため、提供時に上空から飛行機の音が聞こえてくると、一目散に避難していきます。これがイエメンの日常なのです。

各国のNGOが次々と撤退していく中、アイキャンは5月から8月の4ヶ月間、西海岸にあるハッジャ州において食糧提供を実施してきました。ハッジャ州に避難民として逃れてきた障がい児を持つお母さんは、「私たちは小枝で作られた小さな所に住んでいます。雨や太陽からも守られない、とても厳しい環境です。」と話し、寡婦家庭の年配の女性は「泥でできた家に住んでいて、生活状況も困窮しています。どうか食糧の提供を継続してほしい。」と涙ながらに訴えました。イエメンの人々のこうした声は、日本を含む世界へ届いていません。私たちは、この声が途切れないよう、最後までイエメンからのメッセージを届け続けていきます。

フィリピン事業（マニラ・ごみ処分場） 8月30日／パヤタス（フィリピン）

次のステップへ向けてミーティングを開催

フェアトレード生産者団体（SPNP）のお母さんたちは、この日、新規の販売場所開拓について話し合いを行いました。リーダーのビーナさんは、「私たちはアイキャンではなく、独立した団体。アイキャンは1つのパートナーであり、SPNPの活動継続のためには自分たちで行動し、パートナーを見つけて行く必要がある。」と話し、新しいステップに向けて、少しずつですが、確実に取り組んでいます。

ジブチ事業 8月12日／ホルホル・アリアデ（ジブチ）

2つのキャンプにて新しい仲間を迎え入れました

8月中旬、ジブチ南部にあるホルホル難民キャンプとアリアデ難民キャンプにおいて、ソマリアやエチオピアからの難民6名をアイキャンのスタッフとして迎え入れました。新しいスタッフたちは早速、家庭訪問や子どものデータ作成を進めています。両キャンプに暮らすソマリア・エチオピア・エリトリアからの難民の子どもたちへ、継続した「子どもの広場」を届けられるよう新しい仲間と共に活動を続けていきます。

街頭募金 8月25日／愛知

街頭募金のボランティア活動で感じた一体感

高校生・大学生・社会人計12名のボランティアの方々が、フィリピン路上の子どもたちのための街頭募金活動に参加しました。参加者からは、「今回活動に初めて参加してみて嬉しかったことは、同じボランティアとして参加した皆さんとの一体感を感じることができたこと。」との感想をいただきました。1人1人が精いっぱい、フィリピンの子どもたちの現状を通行人の方々に伝えました。

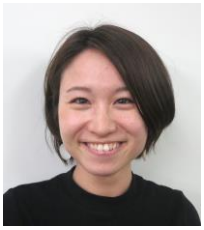
講演・イベント・訪問受入れ 8月1日／愛知

自分と世界とのつながり、できることを考えるための講演会

愛知県私立聖霊中学校の生徒201名に対し、講演会を実施し、フィリピン路上の子どもたちの現状やNGOの活動、世界と自分のつながり等を伝えました。担当した先生は、「貧しくても夢や希望を持っている子どもたちの姿に感銘を受けた。ぜひ生徒のみんなにもこうなってほしいと願っている。またどうすれば彼らが平和な社会で生きていけるのかを考え、それを作り出す人材になってほしい。」と話しました。

2018年9月「世界の課題を自分事として捉える」

＜SDGs推進活動＞



ICAN日本事務局
小椋　美友紀
～プロフィール～
中京大学卒業後、民間企業営業職を経て、2017年10月よりより現職

2015年、国連サミットでSDGs（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）が採択されました。SDGsには、「誰一人取り残さない」ことを理念として、貧困やエネルギー、環境や人権等のそれぞれの課題に対して、2030年までに達成すべき17つの目標が定められています。SDGs達成のためには、日本を含む世界中で、未来の社会や地球をどう変えていきたいのか、一人ひとりが考え、行動に移すことが重要です。

そこで、アイキャンでは、目標の2030年頃に大人になる世代である、愛知県内の小中高生約3,800人と、フィリピンとイエメン、ジブチの子どもたち約3,000人とともに、SDGsをテーマにしたキャンペーン「SDGS Youth Action Plan 2018」を開催しました。同キャンペーンでは、一人ひとりが17の目標の中から1つの目標を選び、「今もしくは未来の自分ができること」を考え、文字や絵で表現しました。

「目標11：住み続けられるまちづくりを」に対し、「近所の人々との強いつながりを持つ」という身の回りの生活に当てはめて考えた子や、「目標16：平和と公正をすべての人に」に対し、「他国の言葉を覚え、歴史を知る」といった、一歩踏み込んだ相互理解のアイディアを書いた子もいました。また、「1：貧困をなくそう」には、募金や物の寄付をする。「3：全ての人に健康と福祉を」には、献血をする。「15：海の豊かさを守ろう」にはごみを拾う、等の自分たちにもすぐに実行できるような、具体的なことも多く書かれていました。

一方で、SDGsは紛争や気候変動のような世界規模の課題にも目を向けているため、身近に考えにくい面もあります。そのため、学校の先生たちは、日頃から子どもたちの質問にも答えられるよう、事前にSDGsについて理解を深めたり、子どもたちが日々の生活の中でもSDGsについて話し考える機会を作ったりして、SDGsを身近に、自分事として考えてもらえるよう努めたそうです。アイキャンでも、日頃から関わりのある先生たちに対し、各目標に対して「できること」の具体例を提示したり、SDGsの説明や必要性を伝えたりする取組みを行ってきました。

ある日のスケジュール

9:00　メールチェック
10:00　事務局にて教育機関向け講演
12:00　日本事務局会議
14:00　事業別会議
15:00　NGO相談員報告書作成
16:00　来訪者対応
16:30　寄付者へお礼の電話
18:00　帰宅

日本で生活をする多くの人は、世界の課題について考える機会は少なく、たとえ課題に目を向けたとしても、具体的にどう行動すれば分からない場合が多いかもしれませんが、きちんと足元に目を向けると、世界の課題とつながっていることに気付くはずです。「SDGs Youth Action Plan 2018」を通して、世界で取り組んでいるSDGsの目標を「自分事」として捉え、「身近にできること」を実践してくれる人が増えることを願っています。

ジブチ事業　9月1日／オボック（ジブチ）

「子どもの保護」に関する保護者研修を開催

イエメン難民が暮らすジブチにあるマルカジ難民キャンプにおいて、保護者40名以上を対象とした「子どもの権利」に関する研修を実施しました。保護者の多くは、キャンプ内の子どもの教育や健康を特に心配しており、過酷な生活状況についての意見が多く聞かれました。研修に参加した男性は、「アイキャンが私たちのメッセージを世界に届けてくれることを願う。」と訴えていました。

スタディーツアー・国際理解海外研修　9月5･12日／フィリピン

ボランティアツアー・スタディツアーに31名が参加

フィリピンのパヤタス事業地、路上事業地を訪問する「ボランティアツアー」と「スタディツアー」を実施しました。「ボランティアツアー」には国士舘大学の学生が19名、「スタディツアー」には様々な世代の12名が参加しました。ツアーに参加した女性は、「帰国してもつながりを持ち続け、自分にできることの一歩として、マンスリーパートナーになりたい。」と話してくれました。

フィリピン事業（マニラ・路上）　9月22日／マニラ（フィリピン）

過去の経験を活かした路上教育を実施

過去に路上生活をしていたカリエカフェのメンバー2名が、路上の子どもたち17名に路上教育を行いました。「病院に行った際に名前が書けないと困ってしまう」等の、カリエメンバーたち自身の経験も踏まえ、自分の名前、生年月日を正しく伝え書けるようにするという内容でした。講師をしたメルビンは、「自分の経験を活かすことで、子どもたちの力になれることがあれば嬉しい。」と話しました。

フェアトレード　9月16日／愛知

「デンソーハートフルまつり」に出展

デンソーハートフルまつりに出店し、フィリピンのパヤタスのお母さんたちが作ったフェアトレード商品をボランティア2名、インターン1名が販売しました。イベント参加者の中には、「去年のハートフルまつりでアイキャンの商品を購入したけれど、壊れることもなく使用することが出来ている。アイキャンが扱う商品からはお母さんたちの技術や頑張り、想いや心を感じることができる。」との声を頂きました。

2018年10月「事業を継続させるリーダーとしての責任」

<フィリピン・ミンダナオ島事業>

ICAN ミンダナオ事務所
Jesus Torreto
～プロフィール～
大学卒業後、NGO職員を経て、2012年12月より現職

私は、2012年にアイキャンへ入職してから、ミンダナオ島において平和構築事業のチームリーダーとして、紛争地の子どもたちが平和の概念について学ぶことのできる「平和の学校」の設立、そして、地域レベルの紛争調停を担う村役員や過去に武力衝突を繰り返してきたグループへの紛争の平和的解決手段についての研修を実施してきました。今回、紛争地における安全対策について学びを深めるために、タイで開催されたUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）主催の研修に参加しました。

研修で特に学びが大きかったのは、チームに分かれて、紛争地における事例をもとに各々の役職を決め実施したロールプレイ（疑似演技）です。私のチームでは難民キャンプにおいて、キャンプの代表者と食糧提供の調整を行う設定に取り組みました。状況は混沌としており、難民たちが「食糧はいつ届くのか！」と大声で叫び、私たちの鞄を奪おうとしたり、他のメンバーを別の場所に連れて行こうとしました。そのような状況下で、私はチームリーダーとして、難民の代表者に対し、「食糧の調達に想定以上の時間がかかっているが、食糧は必ず届ける」という点を伝え続けました。しかし、観察していた講師からは「チームリーダーの第一の責任は、全体を見渡して、メンバーの安全を確保することであり、メンバーが他の場所に連れて行かれそうになった場合は、即座に安全確保を最優先すべき」と厳しいコメントをもらい、私にとっては耳に痛い言葉でした。

私自身も、過去ミンダナオ島で緊急救援活動を実施していた時に、何度も身の危険を感じたことがあります。例えば、食糧運搬中に、検問所において、軍隊が「食糧を一部引き渡さないと、検問所を通さない」と言い、警告として空に向かい銃を発射しました。また、他のチームのメンバーが事業地へ向かっている際に、軍隊同士の銃撃戦に遭遇し、危険な目に遭ったこともあります。どちらのケースでも何とか収拾をつけることができましたが、対応方法を間違えていれば命の危険もありました。

ある日のスケジュール

8:00　事務所会議
9:00　事務所から事業地へ移動
11:00 村役員と会議
13:00 学校建設現場調査
14:00 事務所から事業地へ移動
16:00 研修内容作成
16:30 活動報告書確認
17:00 帰宅

今回の研修を通して、改めてチームリーダーとしての責任を重く感じました。紛争地での事業における安全対策の整備は、大切なメンバーの命を守るだけでなく、事業を応援してくださっている皆さんの想いを、継続的に事業地の人々に届けることにも繋がります。研修で学んだことをチーム内で共有し、安全対策を強化し、引き続きミンダナオ島の平和実現に向けて活動していきます。

フィリピン事業（マニラ・路上）　10月13日／パヤタス（フィリピン）

マニラ日本人学校のバザーに参加

マニラ日本人学校で毎年行われているPTAバザーに、フェアトレード生産者団体（SPNP）のお母さんたちとアイキャンが参加しました。参加者からは「毎年買っているよ！」などの声を頂き、SPNPのビーナさんは「毎年PTAバザーでは多くの小学生が来てくれ、売り上げがとても大きい。SPNPにとってとても大切なバザーである。」と話しました。

講演・イベント・訪問受入れ　10月18日／愛知

中学生６名のアイキャン事務所訪問

学校の郷土学習としてアイキャン事務所を訪れた犬山中学校の中学1年生6名を対象に、アイキャンの活動とフィリピンの路上の子どもたちについて話をした後、ボランティア作業をしてもらいました。参加者は「家族や友人に話をしてアイキャンの活動をより知ってもらい、文具や古本、ハガキ等の寄付活動が広がってほしい。」と話し、自分たちにできることを考えるきっかけになりました。

イエメン事業　10月13日-15日／ホデイダ（イエメン）

戦闘の激しいホデイダ州で約42,000人分の食糧提供を実施

イエメン国内で最も戦闘が激化しているアル・ホデイダ州において、3日間で600世帯（約42,000人分）への食糧提供を実施しました。同州では、6月からの戦闘激化によって、国内避難民の数が増え続けています。地元行政府のメンバーは、「日本のNGOであるアイキャンの寛大な食糧提供と、実施に関わる全ての協力者たちに感謝したい。」と述べ、その様子はイエメン国内のニュースサイトでも報道されました。

街頭募金　10月20日／愛知

伝え方を意識した募金への声掛け

イエメンの子どもたちのための街頭募金活動を実施しました。今回から、配布するチラシをリニューアルし、渡し方を工夫したところ、結果として前回の倍くらいの方に受け取ってもらえました。参加したボランティアの方からは「どうすれば通行人の方の心に伝わり、興味や関心を持ってくれるのか。そこまで意識して声掛けをする必要がある。」と、次回への改善に向けた意見が出ました。

～児童養護施設「子どもの家」拡張用ご寄付のお願い～

―より多くのマニラの路上の子どもたちが、危険な路上から出て生活ができるように―

路上での生活

児童養護施設「子どもの家」（現在は 1 階のみ完成）

寄付の用途：児童養護施設「子どもの家」の 2 階部分が完成すると、30 名から 50 名の身寄りのない子どもたちが、愛情溢れた環境で生活し、通学することができます。ぜひ、ご寄付をお願いいたします。
建設の期間：2018 年 10 月～2019 年 4 月　必要金額：約 1,000 万円（490 万ペソ）

■ご寄付の方法■

1、クレジットカード　今すぐお手続きできます。https://kessai.canpan.info/org/ican/

2、口座引き落し　会報同封の「振込用紙」または、下記サイト（お電話、メール）でのお申し込みをお願いします。
http://www.ican.or.jp/j/my_ican.html

■寄付の種類■

1、通常のご寄付　～好きなときにいつでもできる～
「路上の子ども」特別寄付：クレジットカードでは、1 口 5,000 円からのご寄付を受け付けています。

2、マンスリーパートナーになる　～継続的に応援～
毎月 1,000 円（1 日あたり約 33 円）から任意の定額を寄付してくださる「マンスリーパートナー」を募集しています。
パートナーの皆さまの誕生日には、事業地の子どもたちから素敵なプレゼントが届きます。

アイキャンは認定 NPO 法人のため、寄付者は、税制の優遇を受けることができます。
税額控除の額：その年の認定 NPO 法人等への寄付合計額（※）－2,000 円×40%　※所得税額の 40%が上限
詳しくは、国税庁のサイト（https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/shotoku/1263.htm）又はお近くの税務署へ

―マンスリーパートナーさんのご紹介―　山田裕介さん　「継続できる、何かをしたい」

勤務先であるコープあいちの推薦で、アイキャンのスタディツアーに参加しました。私がマンスリーパートナーになった一番のきっかけは、ツアー最終日に 1 人の「物乞いの少年」に出会い、何もできなかった自分に不甲斐なさを感じたことです。個人としての月額寄付に加え、自分の職場でできることは何かを考えた結果、地域の組合員にアイキャンの取り組みを宣伝するメッセンジャーとして活動しようと決めました。これにより、今では多くの書き損じハガキや切手が集まり、アイキャンの活動資金となっています。

集めています！～書き損じハガキ・未使用切手・商品券～

制ハガキや年賀ハガキ、未使用切手、未使用テレフォンカード、商品券を、送ってください。
ハガキ 1 枚が、フィリピンではノート 2 冊分、又はご飯 2 杯分の価値のご寄付になります！

認定 NPO 法人アイキャン　平成 22 年度外務大臣表彰団体　　**フェイスブックに「いいね！」をお願いします！**
アイキャンは 1994 年より、貧困削減や紛争解決等に取り組む国際 NGO です。
住所：　〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須 3 丁目 5-4 矢場町パークビル 9 階
TEL&FAX：　052-253-7299（火曜～土曜：12～19 時）　**MAIL**：　info@ican.or.jp
Website：　http://www.ican.or.jp/　**Facebook**：　https://www.facebook.com/ICAN.NGO

イロドリ
印刷通販
印刷　イロドリ　SEARCH